

あけのほし 2015年2月

## 「信仰とは？」

菊田行住

「『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。言うておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。」(マタイによる福音書3章8節)

「アブラハムは大きな強い国民になり、世界のすべての国民は彼によって祝福に入る。わたしがアブラハムを選んだのは、彼が息子だちとその子孫に、主の道を守り、主に従って正義を行うよう命じて、主がアブラハムに約束したことを成就するためである。」

(創世記18章18-19節)

「宗教というのは怖いものだ」と考えるのも無理はないと思います。イスラム国の行っている暴力による支配を見ていると、そのように考えるのは当然です。日本でもオウム真理教が起こしたテロリズムのことも、記憶に強く残っていることでありましょう。宗教が持つ、盲信的で独善的な側面があることを否定することは、このような状況では無理があります。確かに宗教や信仰というのは、人々を誤った破壊的な行動に向かわせる力を持っているのだと言わざるをえません。キリスト教においても、聖書の教えとして、他国の人々、他民族の人々、他宗教の人々の権利を力と暴力によって奪ってきた歴史があります。その事を振り返ることなく、「キリスト教こそ誤りなき信仰である」とはとても言うことは出来ません。やはり、キリスト教を含めて宗教・信仰というものには、とても危険なことがついてまわるのだということを、しっかり認めなくてはなりません。そしてその事と合わせて、聖書など信仰の指針となる正典を、正しく読み解くことの大切さを、認めなくてはならないのだと思います。

キリスト教の正典である「聖書」では、アブラハムという人物をとっても重要視しています。それは、神がアブラハムの信仰を認めて、特別な祝福を与えたとされているからです。それ以来、ユダヤ教でもキリスト教でも（どちらも同じ聖書から出発している）、アブラハムを信仰の父として、あるいは民族的な祖先として大変尊重して来ました。ですので、その事を知らなかったり、配慮せずにアブラハムを侮辱するようなことを言うと、ユダヤ教徒もキリスト教徒も怒り出してしまうというわけです。

ただ、そうかといって、信仰者がアブラハムを、それこそ神さまのように崇め奉ることも、同時に誤りでもあります。いくら自分の信仰にとって重要な人物だからといって、侮辱されたからその相手を殺して良いということは、決してないのです。そもそもなぜ、アブラハムが神によって祝福されたかといえば、決して他人を殺して命を奪ってはならないという神が与えた最重要の戒めを（申命記5章17節）、守り通していたからなのです。

冒頭に挙げた聖書の箇所では、そのようなアブラハムという一人の人物をいつのまにか

神格化し、神聖にして犯すべからざるものにしてしまうことの誤りを、指摘しているところでもあります。そしてそのアブラハムの権威に預かり、自らの立場を絶対的な位置に置こうとする人間の身勝手なあり方を、否定する聖書の言葉なのだということです。アブラハムの子孫だから特別なわけではありません。アブラハムの信仰を正しく受け継いで行くからこそ、信仰者なのです。

「復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である」(レビ記19章18節)、『『姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな』、そのほかどんな掟があっても、「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉に要約されます。愛は隣人に悪を行いません。だから、愛は律法を全うするものです」(ローマ書13章9-10節)。旧約聖書でも新約聖書でも、神の教える最も大切なことは、他者を決して傷つけてはならないということです。愛というのは、相手の人々の生存権や諸権利を奪わないという具体的で法的な行為のことをいうわけです。誰もが平等に神によってこの世界に存在させられ、大切に生存権を与えられているという事実を受け入れ、その事を犯さないというのが聖書が教える愛なのだということです。そして、信仰というのは、この愛の戒めを誠実に守って行くことを、神との間で約束することなのです(契約締結)。ですから、そもそも自国民だとか、他民族だとか、あるいは他宗教だという考え方はなく、あるのは、相手が誰であったのだとしても、神との契約関係を第一に優先して、その愛の戒めを守るということであるのです。何より大切なのは、相手の状態や良い人なのか悪い人なのかということではなく、神との関係において、その意志を大切にすることの方なのであります。

冒頭に挙げた聖書の2番目の箇所では、神は確かにアブラハムの信仰を引き継ぐ者たちを、大きな強い国民にすると言っています。ただ、やはりここでも、なぜ神がそうするのかという目的の方がとても大切です。それは、アブラハムの信仰継承者たちを用いて、世界の人々を神の祝福に入れるという目的を遂行するためだからです。ですから、その継承者たちは何よりも、主の道を守り、主に従って正義を行うよう命じられているわけです(創世記18章19節)。その主の戒め、愛の戒め(正義)を守ることによって、世界に平和をもたらすことこそ、聖書が証言する神の真の目的だということです。

イスラム教の正典であるコーランにもこの教えは引き継がれています。日本にあるモスクでは、今回イスラム国によって殺害された日本人お二人の弔いと神の救いがありますようにと祈られています。そしてイスラム国の信仰のあり方は間違っているのだと悔い改めを求めています。

信仰や宗教は一つ間違ってしまうと、確かに大変危険です。人々を憎しみと争いに向かわせ、行き着く先は破滅しかありません。しかし、そこで信仰がち遠ざかるのではなく、正しい信仰・宗教のあり方を学ぶ必要かおるのだと思います。正しく正典が読まれるときそこには偏狭さではなく、人類愛へと向かっている神の意志が見えてくるはずです。